

中国語版に寄せて

はじめて中国を訪ねたのは、一九八四年のことだった。私は、世界野生生物基金（WWF、いまの世界自然保護基金）日本委員会の理事を務めていた。四川省でパンダの大好物の冷箭竹が枯れてしまい、野生のパンダたちが危機に瀕しているというので、その実態調査を行ったのだ。野生のパンダには会えなかったけど、ぜんぶで十六頭のパンダに会うことができ、人工授精で生まれた生後六ヶ月のオスの川川（チュアンチュアン）となかよしになった。赤ちゃんパンダを抱っこするという子どものころからの夢がかなったし、すべり台でいっしょに遊んだのもよい思い出だ。でも、緑色の服を着ていたら竹と間違えたのか、かみついてきたのにはびっくりした。

一九九一年には、上海で開催された音楽イベントに招かれた。『窓ぎわのトットちゃん』の音楽物語が演奏されたのだけど、私は、特訓で身につけた中国語で挨拶をしてから、中国ではだれもが知っている『草原情歌』を歌うことに決めていた。でも、ただ歌うだけではつまらないと思い、途中に京劇の真似を片言の中国語で入れた。するとそれが思いのほかウケて、笑いすぎで椅子から転げ落ちた人がいた。あんなにウケたステージは、生まれてはじめてだった。

二〇一〇年の上海万博では、ジャパンウィークの初日の催しに、大天使ガブリエルみたいな、背中に大きな羽根をつけた衣装で出演した。そのときも、琵琶の演奏で『草原情歌』を歌い、京劇の真似を取り入れた。前回ほどはウケないだろうと思っていたら、前回に負けず劣らずウケた。私が帰った次の日もその次の日も、「ここでおもしろいショーをやっていたらいいが、今日もあるのか」とたくさんの方が集まったそうだ。

私は本を書くとき、自分が「おもしろい！」と感じたことを書くようにしているけど、上海万博のステージを振り返るたびに、私の「おもしろい！」は、日本人以上に中国のみなさんに合うのかもしれないなあと思う。『窓ぎわのトットちゃん』が中国でベストセラーになった理由は、そんなところにあるのかもしれない。

中国語版『窓ぎわのトットちゃん』の、累計発行部数が一千万部を超えたという知らせが届いたのは、二〇一七年の春だった。世界中で三十以上もの言語に翻訳されているが、なかでも中国語版の部数は群を抜いていて、いまでは一七〇〇万部にも達し、日本の八〇〇万部という数字を軽々と追い越した。

もちろん人口が多いことも理由の一つだろうけど、出版社の方から「子どもたちはもちろんですが、小学校の先生とか、作品の舞台になったトモエ学園に憧れる大人たちが多

いようです。図書館で読んだ子どもや、先生の読み聞かせを聞いて育った子どもたちの数も入れたら、三千万人以上の子どもたちがトットちゃんのお話で育って、それぞれに好きなエピソードを持っているはずです」と教えていただき、とてもうれしく思ったことを覚えている。

トモエ学園は、私が卒業したすぐ後に空襲で焼けてしまった。大人になった私は、「トモエの先生になる！」という小林宗作校長先生との約束を果たせなかったかわりに、『窓ぎわのトットちゃん』を書いたのかもしれないと、考えることがある。「こんな学校に通いたかった」とか、「私も、トットちゃんみたいなじっとしてられない子どもでした」とか、「人を差別しない大人になりたいです」なんていうお手紙をいただくたびに、トモエのすばらしさを広められる本を書いてよかったと思う。

昨年十月に日本で出版された『続 窓ぎわのトットちゃん』の、中国語版が刊行されると聞いた。本を書くきっかけは、ウクライナの戦争だった。戦火のなかを逃げまどう子どもたちの映像をテレビで観ていて、「そういえば、家族で東京から疎開したときのことは、ほとんど書いてなかったなあ」と考えたのだ。

日本では、実際の戦争を知っている人がとても少なくなってきたから、私のような体験者が「戦争は罪もない子どもたちも苦しめる」ということを書いておいたほうがいいと思った。でも、いざ書きはじめると、当時のことを思い出すのは、正直に言うところちょっと辛かったし、本にはできるだけ愉快的なエピソードを書きたいと思っている私としては、「こういう本が受け入れてもらえるだろうか？」と悩んだりもした。きっとこれまでの私は、疎開中の出来事を書くのを無意識のうちに避けていたのだろう。でも、一冊にまとめてみると、あのころのトットは、小林校長先生や両親以外の人にも、いろんなタイミングで親切にしてもらっていたんだなあ実感できて、なんだかホッとした。

戦争が終わると、日本中の若者たちが「自分の花」を咲かせることに必死になった。十代の私は、オペラ歌手を夢見て音楽学校に入学した。つらいことや苦しいことがあると、小林先生の「君は、本当は、いい子なんだよ」という言葉を思い出した。そんな時代のこと、『続 窓ぎわのトットちゃん』には書いた。意地悪をされることもあったけど、まわりの人たちの優しさに助けられて生きてきた。

日本でテレビ放送が始まり、テレビ局の専属女優になったころのこと書いた。日本にやってきたアメリカのテレビ局のプロデューサーが、「テレビには、恒久の平和に寄与できる可能性がある」と話してくれたのを聞いて、私はテレビの世界でがんばろうと思った。だけど最近、「恒久の平和に寄与できる」のはテレビだけではないと考えるように

なった。本も映画も、絵も音楽も、それからインターネットだってSNSだって、使い方によっては平和に貢献できるに違いない。

世界中の大人にも子どもにも、平和の尊さが伝わったとき、私は心から「この本を書いてよかった！」と思えるのだろう。今度また中国を訪ねたとき、この本を読んだ子どもたちの感想と、子どもの心を失っていない大人たちの感想を聞くことを、私は楽しみにしている。

二〇二四年三月 春の足音を感じながら

黒柳徹子